

【書 評】

スピノザはいかにしてスピノザになったか
——藤本吉藏著
『スピノザ思想の原画分析』*に寄せて——

中 金 聡

17世紀オランダに生きた異端の哲学者バルフ・スピノザの思想解明に心血を注いだ著者は、その20余年にわたる研究成果を本書初版で世に問い、国士舘大学大学院政治学研究科に提出して2003年に博士（政治学）の学位を授与された。専門的な観点からの本書の評価については、日本におけるスピノザ研究の第一人者にしてスピノザの訳業でも知られる工藤喜作氏が『スピノザーナ』誌第2号（2000年）に書評を寄せているので、それを参照していただきたい。スピノザの主著『エチカ』を翻訳書ですら読みとおせない評者には、本来なら本書の意義を論じる資格がないのはもちろん、その内容を理解したと言い切る自信もないし、そもそもそれに必要な知識や能力がない。わけても著者が傾注したスピノザ形而上学¹⁾の分析をいまだ十分にのみ込めずにいることは、われながらきわめて遺憾に思う。遅きに失した書評という体裁を借りて以下に記すのは、本書を読んで触発された未熟な断想のごときものである。それでも、世紀が五指に満たない優れた知性にのみ許した思考を理解するという難事をなしとげた本書の露払い役くらいにはなれるかもしれない。

* 政光ブリプラン、1999年；第4版、2008年。

スピノザはいかにしてスピノザになったか (中金)

* * *

3世紀半もまえの哲学者についてこのように大部の研究書をいま著す意味はあるのだろうか？ 思想・哲学の研究者でないひとが本書に接したときにおぼえるのは、まずこういう素朴な疑問であるにちがいない。新資料が発掘され、それがその哲学者についての定説を覆すあらたな知見をもたらすというのならまだしも、本書で取り上げられるのはスピノザの主著群であり、それならばすでに十分な研究の蓄積が国内外にある。またどんなに難解な哲学書とはいえ、少なくとも哲学用語にある程度馴染んだ者なら「読めばわかる」はずだし、その時間の余裕がなければ、定評のある哲学史の教科書を読んでエッセンスだけを吸収すればよかろう。どうして20年以上もかけてまたぞろ研究書を書かねばならないのか、云々。

この手の疑問に出くわすたびに、思想・哲学の研究者はこう答える。プラトンは政治的理想主義の絶頂である、ホッブズは絶対主義の権化である、ルソーは小共同体と人民主権の擁護者である、モンテスキューは権力分立論の定礎者である……。これらの人口に膾炙したイメージは、せいぜい初学者向けの「教科書」的な説明でしかなく、下手をすると、リベラル・デモクラシーの最終的勝利に向かう単線的な西洋政治思想「正史」の産物である。かれらが遺したテキストは、その一言一句の意味がいまだ確定されないまま、現代の政治制度を支え立法や政策を正統化する理念の源泉として（あるいはその脱線例として）日々学生たちに教え込まれているのだ。そもそも哲学者のテキストを繙く者が、みな読んで疑問の余地のない一義的なコノテーションを受けとるのなら苦労はない。同じ内容を理解したうえで、agreement to differの原則のもとにそれぞれの立場や信念にしたがって異なる評価が下されるのなら、それなりに有益な対話がそこから生じることもあるだろう。だが、たとえばホッブズの研究者たちのあいだでも、ホッブズは唯物論的な無神論者なのか全能の神を信じる真摯な信仰者であったのか、絶対主義的な君主政の擁護者なのかプロト自由主義者なのか、といった基本的な争点にすら

スピノザはいかにしてスピノザになったか (中金)

いまだ決着はついていないのだ。だから思想家・哲学者についての研究書は今後も書かれつづけるであろう、等々。

そういうことが生じるのも、元をただせば言語の本質に原因がある。ことばはいちど文字にして書きつけられると、それが書かれたもともとの状況から自立し、時空を隔ててそれを受けとる者によっていかようにも理解されうるようになる。ことばの意味は理念的に不変同一であり、それが読むたびにくりかえし現前する、と読み手が朴訥に信じきっていると、テキストの読みのなかに忍び込む読み手自身の主観や関心や先入見、あるいはイデオロギー的志向に無自覚になり、結果として原著者には思いもよらない多種多様なメッセージがいつのまにかテキストに帰せられてしまうのだ (あるいは逆に、ポストモダンを気取って anything goes と開き直しても同じ事態が帰結する)。これでは、哲学の研究と称して自分の哲学を開陳しているだけの、哲学研究者を装うデマゴグのたぐいが跋扈するのもいたしかたがない。そうした研究の最大の罪は、解釈の目新しさが失われて飽きられると、テキストの原著者までもがいわば二度目の死を余儀なくされてしまう点にある。

恣意的なテキスト解釈を避けるひとつの方法は、ことばの意味をその発生の現場に戻して歴史的に理解することである。哲学者がテキストのことばに込めた意味は、それが書かれた当時の語法と語彙、あるいは言説の伝統として継承されてきたトポスのなかで構成されている。テキストとはある意味で、匿名のシステムがたまたまある個人に書かせたものなのだ。したがって過去のテキストを理解するには、その「コンテキスト」である往時の言語慣習を復元し、著者が自分の主張を受け入れられやすくするために利用したりソースを洗い出すことが先決問題になる。ただしこの方法は、テキストを端的に過去に属するもの、現代のわれわれとは直接になんの関係もない歴史的遺物にしてしまう。さらに、テキストの「もともとの・真の」意味なるものが著者の「意図」として実在し、かつ確定可能であることを前提とするかぎりでは、悪しき実証主義のそしりを免れない。要するにそれは哲学の研究を哲学史研究に、つまり歴史学の一部にしてしまうのである。

スピノザはいかにしてスピノザになったか (中金)

ことばの意味は理念的超越性と文脈依存性とをそなえつつ、つねにその両面において未決定性を帯びたものとしてあらわれざるをえない。テキストをめぐって過去と現在のあいだで解釈学的会話が成立し、また永遠に継続する理由もまたそこにある。このアイロニーに耐え、「恣意的であってはならぬ、かといって現代的有意性を見失ってもならぬ」という二重の要求に応えるのが思想史研究というものだ、われわれは耳にタコができるほどそう言い聞かされている。しかしこれを鵜呑みにするまえに、哲学者のテキストを読んで理解するとはどういうことかをいまいちど真剣に考えてみてもいいのではないか。

哲学者の著作には、哲学者が生きた時代の政治的状況への応答にはとどまらない、哲学的反省のレベルに属している部分がある。むしろその部分こそが、その著作を哲学的テキストたらしめているそのもっとも重要な要素であるというべきだろう。ところで、哲学者の著作を第一義的に哲学的テキストとして読むということは、かならずしもそれを聖典のように崇めることではないし、実践的処方を引き出すことができる永遠の真理の貯蔵庫やドグマとして奉じることでもない。それは哲学者の自己理解を理解することである。その意味では、哲学者のテキストをその歴史的「コンテキスト」のなかに位置づける理解も、いまわれわれがもとめている理解ではない。それは少なくとも当の哲学者が自分と自分のテキストについてもっていた理解ではないからである。この理解に資する「コンテキスト」がもしあるとすれば、それは哲学的「コンテキスト」、すなわち、哲学者たち同士の会話に使用された語彙、語法、トポスからなるそれ自体哲学的な言語慣習であるはずだろう。

要するに評者がいいたいのは、哲学者の著作をまえにした研究者の唯一健全な態度は、実践的な態度でも歴史的な態度でもなく、哲学的な態度ではないのか、ということである。そして評者は、本書でスピノザの著作をあつかう著者の態度にその十全なあらわれをみる。

* * *

本書で著者は、もっぱらスピノザが遺したテキストからスピノザ哲学の全容解明にアプローチする。「聖書のみ」(*sola Scriptura*)を思いおこさせるこの「文献主義」の立場は、「テキスト中心主義」といいかえてよいだろう。テキスト外的な情報の引照をテキストの理解に役立つかぎりでも最小にしながら、テキストごとに、あるいは同一著者のインターテクスチュアルな次元で、ロジックの内的に整合的な分析を完結させるやりかたである。本書におけるその徹底ぶりは、スピノザがユダヤ教会を破門されたという周知の事実ですらさしたる意義をみとめられない点によく示されている。哲学の研究はつねにテキストの吟味によってはじまり、テキストの吟味をもって終わらねばならない。対象となる哲学者の身辺事情についての歴史的情報がいくら蓄積されようとも、それは傍証であり状況証拠として利用されるにとどまって、哲学者の発言を事実そうあらしめた原因とはみなされない。この態度は、本書につづく「オルテガ研究の覚え書き」(国士舘大学政経学部附属政治研究所編『政治研究』誌上に連載中)においても堅持されていることからみて、哲学研究者としての著者の基本的な確信事項に属することがらのようである。つまり著者がもともとめているのは、「著者を著者自身が理解していた以上によく理解すること」でも、レオ・シュトラウス一流の「著者を著者自身が理解していたとおりに理解すること」でもなく、「テキストをそれが書かれているとおりに理解すること」に尽きるのだといっても過言ではない。

それはけっして並大抵のことではない——スピノザのテキストを読むだけでも、オランダ語とラテン語に加えて、旧約聖書釈義に欠かせないヘブライ語の知識が要求され、二次文献をフォローするには最低でも英・独・仏・伊の各国語が読めなくてはならないのだ。哲学研究者でもスピノザというと二の足を踏むのは、この語学力のハードルの高さゆえであり、著者がそれをクリアしているだけで評者は賛嘆の念を禁じえない。

スピノザはいかにしてスピノザになったか（中金）

しかし、思想史方法論をめぐる議論が活況を呈する今日、著者のテキスト解釈の方法がナイーブとみえかねないこともたしかであるから、この方法を用いることにより本書がスピノザ研究史になにをもたらすのかを明確にしておかねばならない。「テキストのみ」を原則として奉じることがかえってテキストの恣意的な解釈を呼び込む危険については、すでに確認した。だが本書にかぎってそれを危ぶむにはおよばない。すでにさまざまな観点から論じられ、それぞれに個性的な解釈をあたえられてきたスピノザ哲学に、もうひとつ別の斬新なイメージを付加しようという野心など著者にはないからである。それどころか著者は、本書の各章末尾の「エピローグ」において、スピノザ思想の各教義として周知されていること——「実体＝神＝自然」と要約される汎神論形而上学、自由意志の存在を否定する決定論的自然観、政治哲学的には宗教的寛容と世俗主義を旨とするリベラル・デモクラシーの国家——を所与のものとしている。だが結論が同じだからといって、初発のモティーフまで同じであるとはかぎらない。著者がみずからの課題とさだめたのは、スピノザの思索がそれらの結論群に到達するまでの理路を再構成すること、つまり「スピノザはいかにしてスピノザとなったか」を解明するという一事なのである。

本書の行論は、スピノザ哲学をつくりあげている「実体」「属性」「様態」などの概念のスピノザ哲学内部での履歴^{ヒストリー}、あるいはスピノザがそれらの概念を開陳するにあたって引照した哲学的トポスの伝統をたどるという意味において、ヒストリカルである。このいわば概念の個体発生史は、あらかじめ犯人がわかっている、それを突きとめるまでのドラマをみせる倒叙法のミステリーに近いともいえるが、その叙述がテキスト内在の原則を貫徹して、舞台を遺された主要テキストにかぎり、アクターもスピノザの思索のみとするところが本書の眼目である。言い換えるならそれは、スピノザ哲学をひとつの具体的全体として、つまりその発展の原動力を外部のなにものにも負わず、それ自身の内部に有する活動として理解する試みなのだ。スピノザはデカルト哲学から出発しながら、その心身二元論をしりぞけ、またスコラ哲学用語

スピノザはいかにしてスピノザになったか（中金）

を換骨奪胎しつつ、かたや唯一の「実体」である神を「能産的自然」、かたやそれ以外の世界の有限な事物の総体を「所産的自然」、すなわち神の「属性」の多様な「様態」と捉えた。その原因ならぬ理由、哲学的な内的必然性は、精密きわまるテキストの読みにもとづく本書の特異な概念史的分析により、スピノザ研究史上はじめて明らかになる。

過去の哲学的テキストの研究を自分の哲学を披露する機会とみる自称哲学研究者たちには、本書の展望は慎ましすぎると感じられるかもしれない。またコンテクスト主義を標榜する思想史家たちは、その手法を哲学者に自己完結した体系をもとめる「完全性の神話」に囚われた旧態依然たる方法の一ヴァリエーションとなじるだろう。だが所詮それは、無い物ねだりであり、お門違いである。哲学が「自分がすでに知っていることをよりよく知ること」だとすれば、スピノザ哲学の研究とは、まさしくスピノザが哲学した跡を遺されたテキストのなかにたどりかえして理解することであり、それはまた研究者自身がスピノザとともに、スピノザに即して哲学することを意味する。およそ真正の哲学者のなかには、このやりかたでなければ理解できないものがたしかに存在するのである。

* * *

もちろん本書は初学者向きではなく、スピノザについてすでになにがしかの知識をもっているひとを読者に想定して書かれている。それどころか、西洋哲学史についての一定の素養がなければ、「スピノザの政治学や倫理学並びに神学的な問題についての見解を掌握する場合でも、あらゆるものに先立つ彼の基本的な思考原則を解さねばならない」（1頁）のはなぜかを了解することすらおぼつかないだろう。デカルトがふたつの「実体」として説明した精神と物体を、スピノザは唯一の実体である「神＝自然」のふたつの「属性」へと改鑄した。神は万物を支配する因果的必然性の源であるから、物質の世界のみならず精神の世界においても個物に自由はありえない。この冷徹

スピノザはいかにしてスピノザになったか（中金）

このうえない、ある意味でわれわれの日常的直観にもとる推論のプロセスを、スピノザが生きた時代と環境のしからしむるものでもなく、また「スピノザ」という固有名をもつ人間の奇態な精神構造のなせることでもなく、もっぱらことがらに内在する論理の展開として詳細に解剖して、それがいったいどんなことに裨益するといふのであろうか。

しばしばスピノザの政治思想はリベラル・デモクラシーの先駆思想として理解されるが、そのような解釈自体が、過去を現在から振り返って「後ろ向き」にみやりかたである。英国で「ホイッグ史観」と呼びならわされてきた一種の勝者史観はその典型であるが、過去をそのようなものとして言明することにより未来に影響をおよぼそうとする遂行的発話^{パフォーマティヴ}として理解することもできる。そしてスピノザ政治思想をそのように理解することが、初期の『神学政治論』のみに、しかもそのごく一部分に依拠してはじめて成り立つ点も強調しておこう。本書第7章「政治倫理の分析」で特筆すべきは、先行するスピノザの形而上学的諸概念の分析（およびそこから導かれたスピノザの認識論の分析）を前提とすることにより、『神学政治論』のみならず後年の『エチカ』と『国家論』までの議論を視野に入れ、スピノザ政治思想を全体として整合的に描きだそうとする点にある。そうして浮かび上がるのは、個人性の道徳的価値や尊厳についてのあいまいな信念にもとづくのではなく、スピノザ自身の形而上学と認識論から引き出された人間界の「力」の現象——欲望、感情、本能、「第一種認識様式」に支配されたまま自己保存の追求に明け暮れる人間の「自然」——を所与のものとしつつ、それを「マルチチュード」として支配するために必須の、かならずしも国制の如何に囚われない統治機構からなる国家像である。

それを叙述する著者の筆致に、現実の歴史にコミットする政治思想史の立場からあえて距離をおこうとする意志を感じるのは評者だけではないだろう。少なくとも本書で説明されるスピノザの国家観は、現代のリベラル・デモクラシー国家を先取りするがゆえに価値があり、また論じるにあたいするものとしてではなく、スピノザ自身の哲学から論理的に帰結したものとし

スピノザはいかにしてスピノザになったか（中金）

て、あるいはそれ自体で考察にあたいする政治思想として理解され、論じられている。

ここでもし素人考えが許されるなら、著者に一点問い質してみたいことがある。同じ第7章で著者は、政治を論じるスピノザの著作に成熟期の倫理観とは矛盾する見解が散見しうることに言及し、これを「スピノザ自身によって立つ時代の思潮の枠にとらわれた限界」に帰している（337-38頁参照）。これをスピノザの意図に即してより積極的に解釈する可能性はないだろうか。たとえば『知性改善論』にいう「生活規則」のI——「民衆の知性に適合して語り、かつわれわれの目標達成に妨げとならないことなら、すべてこれを避けないこと。なぜなら、できるだけかれらの知性に順応すれば、われわれはかれらから少なからぬ利益が得られるし、そのうえ、こうしておけば、われわれが真理を説くさい、かれらはよろこんで耳を貸すであろうからである」（畠中尚志訳）——の実践例であったとするのは穿ちすぎであろうか。だがそのように考えるならば、そこにスピノザ哲学の綻び目ではなく、むしろスピノザ政治哲学のたぐいまれなる整合性をみることも可能になるように評者には思われる。道徳の理想と最高の幸福は、政治生活を営むことによってではなく、万物生起の必然性についての直観である「第三種認識様式」によって、すなわち「神に対する精神的知的愛」によってもたらされる（250-54頁参照）。これがスピノザの成熟期の倫理観であるとすれば、それは万人のものにはけっしてなりえないというのがスピノザの結論ではなかったろうか。

* * *

本書を読みながら、著者がスピノザ哲学にたいして企てたものが仮になにかに似ているとすれば、古典的な哲学的テキストに幾度となくほどこされてきたコメントリーではないかと評者は感じた。そういったからといって、本書の意義にケチをつけることにはならない。むしろ正反対である。

スピノザはいかにしてスピノザになったか（中金）

哲学の先達が残したテキストの「注釈」「評注」を書くことが哲学研究のもっとも正統的なやりかたであることは、シンプリキオスやボエティウス、あるいはアヴェロエスやポンポナッツィらによるアリストテレス作品のコメントリーが雄弁に物語っている。現代においても、たとえばJ・デリダの哲学的キャリアの出発点がフッサールの小著『幾何学の起源』に付した「序説」の長大な注釈であったことを想起するだけでよい。それらの営為は、われわれがいま「解釈」の名で理解しているもの（しつこいようだが、その多くは、古典の「現代的意義」や「アクチュアリティ」なるスローガンのもとに、テキストをどれだけ勝手に深読みできるかを競いあっているようにしか評者にはみえない）とは意匠からして異なっている。もちろん注釈者にもそれなりの「実践的」な意図はあるだろう。ポンポナッツィならば、トミズムによるキリスト教化からアリストテレス『靈魂論』のラディカルな自然主義的含意を救出することであったし、デリダはデリダで、ヨーロッパ形而上学の根底に巣喰った再現前の呪いを摘発することであった。だが評者はあえて、それらが第一義的には、古典的なテキストのなかに原著者が記した哲学的自己理解をかれらが理解しようとしてつとめた結果であり、また読者にもそのやりかたでテキストを理解してもらいたいと願った結果であったと考えたい。哲学の研究はそうにして後世に受け継がれていくものなのだ。

スピノザの著作は、誰しも「読めばわかる」とはいえない哲学的テキストの右代表である。それを理解するには、幾世紀にもわたって堆積した「解釈」の塵芥をかきわけ、自分自身の好悪や先入見にすら囚われずに、テキストの一言一句を地道にたどらなければならない——つまり哲学研究者ならぬ大多数の人びとはもちろん、名声を手に入れるのに性急な研究者にもできないことである。そのようなスピノザのテキストを、それでも自分で読んで真に理解したいと願うひとが必要とするのは、信頼のおける「コメントリー」なのだ。そのようなひとがいるかぎり、つまり評者のような人間が今後もあるかぎり、本書は脇において開かれるであろうし、したがって本書の耐用年数はスピノザの著作そのものと同じくらい長いだろう。研究者が一般社会か

スピノザはいかにしてスピノザになったか（中金）

らの賛辞を欲することなどありえない。研究者の願いはただひとつ、将来の学問のたしかな礎の一部に、現在よりもおそらくは壮麗かつ堅固な大伽藍を支える名もなき小さな煉瓦の一片となることである。

注

- 1) 書評に注などわずらわしいだけであろうから、これひとつにとどめておく。形而上学 (metaphysics) とは元来「自然学 (physics) のあとに (meta-) くるもの」を意味する。アリストテレス著作集 (corpus) のなかで *Physica* (自然学) を論じた作品のつぎに配置されていたために *Metaphysica* の名があるとも説明されるが、その学としての性格はこう説明できるだろう。「自然学」が経験的に観察可能な自然の事象を記述する学問上の一分野であるとするなら、自然の事象の背後にあってそれを成立せしめる形而上学的なものを尋ねる学問は、その対象が不可視であるがゆえに経験的なやりかたに訴えることができず、推論や直観のような理性的洞察を用いなければならない。デカルト、ガッサンディ、ホッブズ、パスカル、そしてスピノザを輩出した17世紀ヨーロッパは、いわゆる自然科学革命により、それまで優勢であったアリストテレス＝アキナス的な自然観に背馳するような自然現象が多数観察されるようになり、この新しい自然学を正当化するためにあらたな形而上学的确立がもためられていた時代であった。そしてもちろん、この意味での形而上学的探求は、現代でも哲学の最重要部門でありつづけている。